

平成28年度農業後継者特別支援事業

事業主体名 鹿児島県立農業大学校農学部野菜科

1 目的

この技術は不耕起栽培と併せて、佐賀県の篤農家が開発した技術で、トップ農家の単収は8～9t/10aとなっている。本県の主要品種「さがほのか」には欠かせない技術である。本県でこの技術に取り組んでいる農家は、南九州市2戸、出水市5戸、阿久根市1戸となっており、特に出水市の1戸は2段階育苗と不耕起栽培で平成26年度産単収6.5t/10aの実績をあげた。

そこで、農業大学校でも実証を行い、2年後には7tどりを達成し、収益性の向上を図り、学生の就農意欲を高めたい。

写真1 硬プラハウスに完成した2段階育苗施設  
(台風でも2段階育苗で被害はなく、安心して育苗ができる)



2 実施状況

課題1：いちご（さがほのか）の不耕起栽培と小型ポットを活用した2段階育苗の実証

小型ポットの二段階育苗であり、苗が小さく、初期の年内の収量が上がらなかった。しかし、年が明けてから収量が右肩上がりに増えてきている。現在で1tを超えたところである。生育や開花数は、多くなってきているので今後の伸びに期待したい。ハダニの発生が多かったため、ハダニの天敵であるチリカブリダニの放飼行って防除を行っている。

写真2 不耕起・小型ポット育苗の栽培状況（3月31日）



課題2：小型ポット育苗を活用した2段階育苗が高設栽培の生育・収量に及ぼす影響の検討

小型ポット育苗を活用して、9月15日定植・20日定植にさがほのかを定植した。収量は15日定植のほうが多いが、商品化率では20日定植のほうが良かった。小型ポットは苗が小さく、初期の収量が上がりにくい、2月以降収量が上がってきた。糖度平均は目標である8よりも下回らなかった、品質の良いおいしいイチゴができた。商品化率は目標である80%を11～12月は下回っていたが、1月からは商品化率が目標より上回っていた。始めは小さく商品にできなかつたりしていたのが原因だと考える。

写真3 小型ポット育苗の高設栽培の生育状況(3月31日)



課題3：さつもおとめの小型ポット育苗の生育・収量におよぼす影響の検討

慣行ポリポット育苗と二段階小型ポット育苗の比較を行った結果、頂花房の収量が慣行育苗区が高く慣行育苗の収量が高くなった、2段階育苗の小型ポットは2番花房から収量が増えていくので今後の収量の伸びに期待できる。さつもおとめは、さがほのかに比較し糖度が高かった。頂花房の収穫のピークが1月2月となった。

写真4 小型ポット苗の定植作業（9月20日）



3 今後の課題、取り組み

就農後イチゴ栽培に取り組む学生もおり、不耕起栽培、2段階育苗という新しい技術に学生が栽培に取り組み、栽培のメリット、デメリットを実感できたことは、学習効果が高かった。次年度に技術の確立と単収7トン取りを期待する。